

ムラが生んだノロ（下）

— 沖縄一集落に生きる神人のライフヒストリー —

石井 宏典

要 旨

沖縄本島北部に位置するひとつのムラをフィールドにして、神行事への参与観察および神人と呼ばれる女性祭司への聞きとりを重ねてきた。本稿では、10代半ばから70年近く祭祀組織の中心となるノロを務めてきた女性のライフヒストリーをとりあげる。彼女がどのような経緯でムラのノロとなり、現在までどのようにして神行事を担い続けてきたのか。これらの問いに社会心理学の立場から接近する。後半部である本稿では、生活環境の変化とともにムラ人の神信仰が薄まりゆくなかで、神のまなざしを内在化させた彼女が周囲に支えられ神行事を継続してきたさまが辿られる。神人たちが行事のたびに拝所をなぞりつづけることで、ムラ人たちは神々とつながるそれらの場所に包まれながら、他のどこでもないこの土地に生きる者としての日常を送ることができている。

IV. 神行事を背負う

1. ヌル殿内を造る

千代さんがヌル（ノロ）としてムラに出ると、「天三神様」の^{あまみ がみさま}のことを教えた白鬚の翁がふたび夢に現れ、ムラのヌルとして拝むべき場所を正した。それまでは、ニーヤーのヒヌカンを拝んでいたが、ヌルが拝むのはそこではなく、同じ敷地内にあるメーヌヤー（前の家）と呼ばれていた茅葺きの離れという。そこには床の間だけしかなかったので、ヌルヒヌカン（火の神）とウタナ（御柵）を造りなさいとの指示だった。

〈ヌル殿内の指示〉 [2012-08-09]

ヌル：むこう（ニーヤーの離れ）はね、トコ（床）だけあってね、トコだけ真ん中であって。…備瀬では3月4日にはね、女の節句とってお重作って、めいめい友だち揃って、よくお遊戯したり、いろんなこと…しよったわけさ。かならず向こうのヌル殿内に（集まって）。このときまでは、ヌル殿内とってわからんわけさ。向こうは空き家だから、大きなお家



写真4 ニーヤーとヌル殿内（正面と右手、1989年の五月ウマチー）

だったわけさ、向こう。これ（いまのヌル殿内）の倍の倍ありよったはずよ。で、こっちに揃っておって、女の同級生仲間、隣近所の人がよく遊戯したり、いろんなこと、…ありよったわけさ。このときまでは、ただこっちにね、床の間だけあって、イジョー（絵像）が、掛け軸だけはありよった。（他は）何もなかった、このときまでは。

もう、うちが出てから、うち16のときにこのヌルというあれに出たから、これから後はね…、この（ニーヤーの）位牌、トコ、向こう行ってウタナといって拝みよったわけさ。拝んだけど、うちがちよつといろんなことわかるようになったからね、もうこの水戸黄門さんの、東野栄二郎だったかな、あの人にそっくりな人が、每晚うち（のこと）手引いて連れて行くのは、ニーヤーなわけさ。向こう行って、…向こうは茅葺きで戸開けて、昼はもうぜんぶ戸開けてやったから。この人が来てね、「ヌルさんほどこ拝むね」と言ってね、「ヒヌカンさんよ」（と聞くわけ）。だから「こっち」と言って、もう自分が（ニーヤーの）拝むところ言うわけさ、この人に。したらまた、「仏壇は」と言って、「仏壇はこっち拝む」。またウタナ、あれはウタナというのは上にお通しするところだから、「向こう拝む」と言って話をしたら、もうこれだけ終わるわけさ。「もう今日の話はこれで終わり」と言って。

また翌日いらっしゃって、また拝んだら、また（今度は）ヌル殿内に（連れて行った）。このときまではヌル殿内といってわからんわけさ、ただメーヌヤーといって、こっちに造られていた。…この男の方がいらっしゃってね、またうち手つないでよ、こっち連れて行くわけさ、いまのヌル殿内に。「このイジョーは何ね」と言って、掛け軸は女の人がね、白い着物、着物じゃなくて白い洋服よ、もう床まで長い（ものを着けていた）。…だから「こっちはなんねー」と（その男の人が）言ったら、こっちはトコ。掛け軸（がある）はトコといってわかるからね、「トコ」と言ったら、「じゃあ、（あっちの）ヒヌカンは門

中と、ニーヤーでしょ。あんた（ヌルのヒヌカン）と一緒にできるね」と言って、この人が聞くわけ、わたしに。うちから、ぜんぶ話させるようにこの人が聞くんだから、返答はするわけさ。だから向こう（ヌル殿内に）連れて行ったから、すぐこっちにはヒヌカンして、こっちにはトコ、こっちにはまたウタナがある。この人が「よし、よし」と言って。で、これからヒヌカンとウタナを造ったわけ。

聞き手：ヒヌカンとウタナ。

ヌル：ウタナ。トコはありよったからね、掛け軸はみんな戦争でなくなしてわからんけど、（いまの）掛け軸はただ七福神の、ただあれやったんであって。ほんとは女の人がね、きれいな女の人がこんなして手を合わせて、女の人が（描かれていた）。描く人がいないわけよ、だから（いまは）この七福神ただ飾ってあるんであって。このお爺さんが教えなかったらいまこのヌル殿内はなかった。教えたのぜんぶ実行して。

ヌル殿内を造るまでのこうした経緯については、病床に現れた翁が「天三神様」を示したエピソードとともに繰り返し語られた。もうひとつ別の語りを重ねることでこの間の事情をさらに明確にしてみたい。

〈ヌル殿内こそが持ち職〉[2013-05-27]

ヌル：（メーヌヤーは）茅葺きの大きな家でね、（以前は）1カ年1回はかならずもう備瀬区から茅みんな持ってきてよ、これ葺き替えしよったわけ。で、大きな（家）だったから、こっちは。このときまでは、こっちはヌル殿内ということはわからんわけさ。だから、こっちは、戦前は立派なトコがあって、こっちに女の人が（描かれた）ね、掛け軸がありよったわけ。けどもうヌル殿内ということは誰がもわからんわけでしょ…

（夢に出た男の方が）「じゃあ、あんたこっち来なさい」と言って、（メーヌヤーに連れて行った）。…（当時は）トコだけあって何もなかったわけ。いまはもう（ヒヌカンとウタナも）立派にあるでしょう。…「こっちは何ね？」と聞くわけ。聞いても、うち、わからんでしょ。だから、こっちには立派なトコがあって、「女の神さまが（描かれた）掛け軸がありよったということだけは、わたし、わかるんだけど」（と答えると）、「（ニーヤーのほうを指して）こっちはニーヤー、あんたがたの門中のイガミが拝むところ。あんたは、ヌルはね、ムラと一緒にだから、あんたはこっち（ニーヤー）は拝んでもいいけどね、あんたのムチスク（持ち職）はほんとはこっち（ヌル殿内）ですよ」と言って教えるわけ。

聞き手：なるほど。

ヌル：だから、こっちにヒヌカン（造りなさい）。で、トコあるでしょ、トコは戦前からありよったから。で、また上にはウタナ（を造りなさい）。「一日十五日にはあれ、グシク、ミーウガンに拝みするわけ、あれしなさい」と言って、このときに教えられて、うちに教えたから。また玉城にユタさんがいたわけさ。

聞き手：マツさんね。

ヌル：うん、あの人に聞くわけ。かならずしもあの人のところに、うち（相談に）行きよったから。

聞き手：あ、夢見た後に。

ヌル：して、聞いたら、「あんたが言うようにしなさい」と言ってよ。「あんたに教えるんだから、あんたがやるようにしなさい」と言って、初めていまのヌル殿内はできたわけ。

ヌルになってからふたたび夢に現れた翁の指示は、ニーヤーのヒヌカン、ウタナ、トコ、そして仏壇はあくまでニーヤー門中が拜むべきもので、ムラのヌルとしてはヒヌカン、ウタナ、トコを備えたヌル殿内を造り、それらを拜みなさいというものだった¹。つまり、ヌルはニーヤー門中から出てはいるが拜むのはあくまでムラ全体のことだから、そのことをきちんと区別しなさいという指示だった。ユタの玉城マツさんも、この指示とおりにするようにと千代さんの実行を促している。その後しばらくして、ヒヌカンとウタナが造られたヌル殿内は、ムラの神行事にはかならず神人たちが集まって行事開始の報告をする場所となった。

ところで、これまでの聞きとりの内容を付き合わせていくと、夢に翁がふたたび現れてから、ヒヌカンとウタナを備えたヌル殿内が完全にできあがるまでには、だいぶ時間の経過があったことがわかる。まず、①ヌル就任後のある時期に夢に翁が現れる。そして、②1972年ごろ、木造の公民館を建て替えたときに出た古材を再利用して木造瓦葺きの建物ができる。さらに、③1980年代半ばに有志が申し出て、ヌルの希望を叶えるべくヒヌカンとウタナを造ることでヌル殿内としての体裁が整う（写真4）。おおよそこのような流れを辿ったとみられる。このように長期にわたる過程を千代さんは持ち前の粘り強さで実現していった。

2. 生活環境の変化

1964（昭和39）年に兼次松枝さんが両ニガミのひとりとしてムラに出るさい、その過程を千代さんはヌルとして懸命に支えた。当時、松枝さんは27歳、千代さんは32歳だった（写真5）。このときから現在に至るまでの50年間ふたりは互いに支えあいながらムラの神行事を担い続けてきた。

つぎの千代さんと松枝さんとの語りあいは、ムラ人の多くが自給的な生活を送っていたころの食事の場面を描写している。話題に出てくる芋も粟も、そして豆腐を造る大豆もすべて、自分たちの畑でとれたものだった。

〈自給のくらし〉 [2012-01-25]

ヌル：夏のときには、いちおうお昼ご飯、芋食べるでしょ。食べて、夏はちょっと休憩して畑に行きよったから。かならずしもまた3時にはね、芋たくさん持って行って、ニンニク塩漬けしたり、また砂糖漬けしたの、かならずこれ持って行ってね、食べよった。



(比嘉稔氏提供)

写真5 ムラの神人たち（前列中央が千代さん、右隣に松枝さん、1968年ごろ）

松枝：隣のおばあちゃんたち、みな集合して。

ヌル：これもね、お家の中じゃないよ。木の下、…また、ぜんぶ集まりよったよや。…いまはナー、扇風機もあるからもう外に出ないけど、アッサーヨーイ、粟の時期なったら、このアワメー（粟飯）食べるために、ぜんぶ庭に出てヤー、ハーッサヨーイ、エーナー、食べて。

松枝：夕食食べる時よく庭に出よったね。

ヌル：夕食はぜんぶ庭で食べて。また、天気の良いときにはこっち寝ておって。星眺めて、あの星ティーチ（1つ）、ワンティーチ（わたし1つ）、…叫んでね。あの星ターチ（2つ）、ワンターチ（わたし2つ）〔笑う〕。

松枝：あの星1つ、わたし2つ、星2つ。みんな何か、結婚式とか何かあるときに、「お豆腐（造り）をお願いします」といって（頼まれた）。豆腐、隣に各豆持って行ってね、「豆腐を造ってちょうだいね」というふうにして、集められよったのよ。そしたら、このお豆腐造ったら、身（豆腐そのもの）はもうあっちのものだから、預かったところに持っていかないといけないから。この上のクンスといって汁、汁をよ、「豆腐煮えたよー」と言って、隣近所みな呼んで。

ヌル：また、このカスはイリチャー（炒めもの）してよ、ハーッサヨイナー。

松枝：また芋囲んで、この上の、うわ汁を飲みながら、おしゃべりしよった〔笑う〕。…

ヌル：いろんなや、昔のこと考えたらいまはナー。

松枝：ああいう光景っていうのは、たいへんよかったような気がする。「おばあ、クンスニイトンドー（煮えてるよ）」と、隣のおばあも呼んで、みんなでこうして。

生活環境をめぐる変化は、当然、ムラの神信仰にも影響を与えた。遠い山に取りに行った薪は、各家庭で石油コンロが使われるようになると必要がなくなり、水を求めて並んだ共同の井戸は、水道設備が徐々に整うにつれて足が遠のく場所となった²。旧暦5月5日には、井戸水の恩に感謝してムラ内のいくつかの井戸を巡るカー（井戸）御願という神行事がある。2013年、その行事を終えた翌日、千代さんは水事情にまつわる変化をつぎのように語った。シリガーは正月の若水を汲む井戸でもある。

〈井戸の拝み〉 [2013-06-14]

ヌル：（カー御願の日にシリガーに集う人はかつて）いっぱい、いまはこれだけだけど（このときの参加者は神人3人および区長と手伝い2人だった）。もうほんとや、このおばあちゃんが亡くなって、いまの時代はもう水道ができたから、もうこの井戸の恩はわからんわけさ。だから、お婆ちゃん時代には、ほんとと南の方もシンバーリ³のからもね、もうほんと、めいめいお重作って、いっぱいだったよ。ずっと向こうのお家の道のところまでいっぱいだったのに。うちが（他の3つの井戸を）拝んで来るのを待っていたの。…いっぱいだったのにナア。このお婆ちゃんたちなんか亡くなったからもう。いまはもう、井戸の、水のご恩はわからん。みんな、めいめいのお家に水道があるでしょ、だから。うちなんか、（正月の）若水はぜんぶ向こうから取ってきて。

聞き手：いまもね。

ヌル：うん。やるけど、もうやるのは（ニガミの松枝さんの夫である）辰雄さんとね、うちのおやじ（夫のこと）とじゃないかな。ほとんど取らない、水汲みに行かないというのに。辰雄さんがよく行くし、うちのおやじ（夫）はもう自分の責任と思ってるからや、行くよ。なんとも言わなくても。で、家にお供えするのは若水とって、前まではこの水でお茶も沸かしてしよったけどね、いまはもう。うちはお茶はしないけどね、このお水、コップに入れて、ヒヌカンとね、またトウパシリ（縁側から拝むこと）とって、ここからお宮向かってする（拝む）のもあるから、…若水あげて。また仏壇はやる。

1960年代までは、4月と6月の大御願そして9月のミャーラン御願などのときには、ムラが用意した舟（サバニ）に乗ってナカリユグの下の方からミーウガンまで渡った。波が強くてミーウガンに舟を着けられないときには、渡しの男たちが腰まで水に浸かりながら神人たちを背負い渡してくれた。しかし、いつしか舟を出してもらうことが期待できなくなると、潮の満ち引きを考慮に入れて、自分たちで歩いて渡れる各月20日の午後にこれらの行事を固定させた（図6）。



写真6 干潮時、ミーウガンに渡る（2013年の四月大御願）

3. 海洋博と新興宗教

1975年に開催された沖縄国際海洋博覧会は、本部半島の先端^{もとぶ}にあつて幹線道路からも外れていたこのムラの環境を大きく変えることになった⁴。この国家的イベントを契機としてムラの外へと働きに出る女性たちが増え、多くの家庭が農業を軸とした自給的なくらしから賃金労働を頼りにした消費生活へと移行していった。つぎの区長とのやりとりは、神行事をめぐるかつての状況と現在とを比べた内容となっている。ちなみに、海洋博が開催されたのは千代さんが43歳のときだった。

〈昔と今〉[2011-12-18]

ヌル：ほんとナア、いろんなことありよったけどや、いまは形だけ。この、うち出て始めのもの考えたらや、いまは形だけ。拝みもなんでも。

聞き手：形だけか。

ヌル：シニグ（旧暦7月25日）のときにはね、アッサイモー、こっちいっぱいだったよ。エー、シニグの場合や、こっちミカンも何もない時季だからね、具志堅（隣ムラ）なんかからね、（ミカン）売りに来よった。…いっぱいだったのに、売り物する人。…このとき考えたら、いまはただニセモノよ、いまの行事は。このときまではナアー、お宮の前から〔力を込めて〕いっぱい。…ナアーほんとや、いま自分が出始めといまと考えたらな、天と地の差あるよ。

区長：この60年、相当変わってですね。

ヌル：エー、このウンサフムチモーレー（旧暦7月22日の夜に行うサグンジャミ）はね、夜にハジマイセーヤー（始まるさ）、翌日の10時すぎまで（かかった）。…ワハムンシンカ（神

人の補佐役の男たち)ね、半分ずつ分けて寝かしよったよ。翌日のンキガ(男)のハシチ(の準備)があるから。これ考えたらや、ハイサイもう、夢みたいよ。またあの四月大御願、六月大御願になったらね、みんな参加する人、お重作ってくるさーね、かならずしもね、お重と酒持ってきて、酒でうちに、健康(願い)あれしてや、またご馳走もや。ぜんぶいくらか受けよったから、もう来る人が置いたらお膳のいっぱいありよったよ。これ食べきれない、もう[笑い]。ナァーこのときまではもう考えられないぐらいのね、行事だった。いま16、7(歳のとき)だから恥ずかしいさーね、けど、自分の務めだから、この人なんかの盃もしないと。また盃、ひとりの人はね、うちの口に、飲みなさいと言って(勧めた)。

区長:[笑いながら]悪い教育ヤサ。

ヌル:[ため息をつくように]ほんとナァー。

聞き手:ほんとそういう行事が形でなくて実質があったというのはいつごろまで?…

ヌル:エーあれからなくなった。

区長:海洋博。

ヌル:海洋博来たから、トォーこの海洋博前まではありよった。海洋博来たからね、このみんな、お母さんなんかぜんぶあれ、海洋博に仕事出たさね。もうこのときからちょっともう崩れて、だんだん崩れていった。

聞き手:そうか、海洋博の仕事。

ヌル:もうみんな、ぜんぶ仕事出てるからや、もうこのときからはちょっと、だんだんなくなったわけ。

1970年代には新興宗教が、ムラから中南部に働きに出た人を經由して持ち込まれ、神信仰とのあいだに摩擦を生じさせるようになった。

〈備瀬という根元〉[2010-08-26]

ヌル:いろんなもう、A会信仰している人なんかね、ハッサヨー信仰しているはじめては大変だったよ。うちなんかにもう、どこかの先生とって(ムラの信者が連れて)来て、もう1時間ぐらい、もういろんな話、ヌルが死んだら成仏しないとか、なんとかかんとかもう、大変だったよ。〈へえー〉だったけど、うちはもう、うちの宗教があるからね、「死んでからは誰がもわからんからいいよ」と言って。うちのおやじがもう帰したよ。「帰りなさい」と言ったら、「1時間はこっちにいるもん」と言ってね、もう大変だったけど。いまはもうどうもない。

ハッサヨー、大変だったよ、やっではじめては。もういろんな、うちなんかどんなに怒られたか。この人、男の人がやっていたわけよ。うちによ、「あんたは備瀬のヌルさーね、わたしはA会のコレ(親指を立てる)だからね、2人勝負しよう」と言うわけさ。「何の勝負?」と言ったら、「誰が成功するか勝負しようね」と言ったから、「うちなんかはね、備

瀬の氏神信仰して根元あるけどね、おじさんなんかはどこから持ってきたのかわからん。ただ備瀬の部落に持ってきただけで、こっちに根元はないからね、根元ない宗教は風が吹いたら飛んでいくよ」とうちが言ったわけさ。だから、この人がお経を唱えながら、ずっと、うちがこう言ったから、（うちの周りを）回るわけさ、お経を唱えながら。で、またもう1人信仰してる人が来てよ、（そんなことをするなとそのおじさんが）怒られているわけさ。…大変だったけど、いまはもうあまり、信仰してる人はいるけど、もう、うちのこと言わない。（あのときは）「ヌルは死んだら成仏しない」と言ったけどよ。

聞き手：ひどいこと言うんですね。

ヌル：「死んだら誰がもわからないから、成仏しないかするかはわからんけど、いいよ」（と返した）。大変だったよ。いまはもうなんともないけど。…うちなんかは、備瀬なんかは、備瀬という根元があるさーね。神様もこっちにいらっしゃるからもうやってるけど、「ナッター（あなたがた）は、あんたがたはなあ、どこから来たのかわからなくて、ただ備瀬に來ただけで、こっちに根はないさね、だから、エー、ハジプキーバヤー（風が吹いたら）トブンドー、飛んでいくよ」と言ったよ、この人に。だけどもう、この人なんかもう屋敷も売って。

聞き手：飛んでいったんだ。

ヌル：飛んで。アーサツイもう、だから信仰してもね、めいめいの信仰さーね、だから人の信仰のものには文句も言わないで、自分の信仰（してればいいのに）。うちなんかはうちの信仰があるから、これでいいわけだけどよ。なんで、あんなに言うかねと思うけど。うちなんかは、ぜったいこんなことは言わないけど。

海洋博前後の状況変化のなかで、「ヌルブチ（扶持）」というムラの慣習が途絶えている。すでにふれたとおり、ムラでは、旧暦3月のそら豆、6月の粟、そして9月の打豆（小粒の大豆）というそれぞれの収穫期に、稔りに感謝する行事が行われてきた。ヌルブチとは、これらの行事にあわせて各家から1合ずつ徴収して供え、ヌルに贈られるものだった。この慣習が廃止されたのは海洋博の前年のことという。

そして、海洋博はムラの南端も会場用地として組み込んだため、集落はずれの南側に集中していた墓群を東方の台地に集団墓地を造って移転させることになった。この時期に千代さんはシマのあちこちで何度もハブに遭遇している。このときもまた彼女は、ユタのマツさんに指示を仰いでいる。

〈墓移転とハブ〉 [2014-01-25]

ヌル：墓が移動するときにはね、うちの門にも〔笑いながら〕、大きな蛇がいて。こっちで木に、ちょうど、こっちはうちなんかの門にフクギがあったわけさ。…この木に、うちの。また、こっちに、ちょうどこっちに道があるでしょう、こっちはこんなして〔片方の手

腕で蛇が頭を構えるような形を表現して] 立っていたよ。こんなにして。

聞き手：それはお墓を、海洋博で（移転させたから）?…

ヌル：引っ越す時期にね、何かわからんけど。

聞き手：ハブが立っていたんだ。

ヌル：うん、こっちに立っていたよ。

聞き手：それは、ハブは神様の使いか何かなんですか？

ヌル：そうね、だからあの、一応うち、ユタさん（に聞きに）行ったわけさ。だから、これ（墓の移転）は、うちがさせたもんじゃなくて、もう国からやってるものでしょ。だからお宮行って、わたしがさせたもんじゃないから、これは備瀬の有志が合点やって（して）、やるんだから。うちがさせたもんじゃないでしょう。だからこんなことはさせないでって、拝みしなさい、いうことだね。〈あーそうなんだ。〉何回か蛇出た。また向こうにはヤギのカズラ刈りに行ったら、足袋履いていなかったら、うちやられていたよ。足袋にまた、足のこの。

聞き手：それは同じ時期にですか？

ヌル：もう、海洋博の来たときにはね、何回か。またうちの畑でも。うちのおやじも一緒だったよ、このときは。

聞き手：それで、ヌルさんはユタさんのところに聞きにいった。で、国がさせてるものだからっていうふうに。

ヌル：お宮に行って（拝んだら）。…このときからは何もなかった [笑う]。うちがさせたもんじゃないでしょう。〈そうですよね。〉これはもう、向こう（海洋博の会場になった土地は）ぜんぶ墓、ぜんぶ墓だったわけさ。だから、いまはきれいになってるけど、（昔は）向こうはなかなかもう行ったことはなかった。

4. 亡兄のヌジファ（抜魂儀礼）

終戦から1年ほどたったとき、十・十空襲後に宜野湾で「石部隊（第62師団）」に入隊した長兄が「首里方面」で戦死したとの知らせを受けた。その後しばらくたって千代さんが30代のときに、夢にその兄が現れて、自分の魂を故郷の墓まで連れて行って欲しいと懇願した。生前、兄はヌルを務めることになる妹をいつも敬っていたという。そんな兄だからこそ、ヌルとなった自分に夢で居場所を教えたのだと彼女は考えている。

〈妹を敬う兄〉 [2012-09-07]

ヌル：うちの兄さんがいるときにはね、しょっちゅう、「昔だったら、妹だけ言葉遣いは丁寧にしなさい。うちなんか、あんたには丁寧な言葉遣わなかったらできないよ、昔だったら」、もうこれは、しょっちゅう言いよったわけ。言いよったから、また兵隊に行くまでは、兄さんのそばにうちしょっちゅう寝よったわけよ。だからナー、あんな夢も見せ

て、やったかねえと思って。これひとつはほんと、もうこれ（ヌジファをして）からは、うちの兄さんのことの夢はぜんぜん見ないわけ、うん。これやって、やらない前は兄さんがしょっちゅう来るのわかりよったけどや、もうこれすんでからはぜんぜん、もう見たことない。これやってからは…

聞き手：で、ヌジファの儀礼っていうか、それをヌルさんがやられた？

ヌル：もうこっちからユタさん頼んで行ったら、お金もかかるし。もう自分ができるだけやったらいいからと思ってよ、兄さんがうち頼むんだから。兄さんが、うち、もうしょっちゅう兵隊に行かない前から、もうわたしが（小学）6年なりよったから、これ（ヌル）に出るということはわかって。また病院に連れて、もうこのときまでは車もないし、諸志の病院、諸志、今婦仁の。向こうに連れて行くのも、兄さんが連れて行きよったわけ。2人歩いて行きよったからや。兄さんがうち（のこと）はほんともうかわいがっていたわけ。で、兄さんが連れて行って向こう（病院）で、注射なんかして、また薬もらってきたら、またお家まで連れてくるの、歩いてだから。兄さんがこんなにやったから、もう兄さんの恩もたくさんあるし、また兄さんはうち妹だけど、「昔だったら、簡単には話できなかった。敬うぐらいのもんだから」ということは、よく兄さんがうちに言っていたわけよ。だから、兄さんがこんなしたら、うち笑いよったわけよ、うん。

聞き手：それ、敬うっていうのは、そのヌルさんになる人だからという？

ヌル：もういろんなこと出ていたからや。兄さんもわかりよったわけよ。

聞き手：きょうだいでそう言ったんだ。妹だけどそういう敬うべき人だって。

ヌル：しよったけど、ダァー戦死して。

ヌジファとは、「居住地以外の所で客死したり戦争や事故などにより非業の死を遂げるなどしたばあい、死場所に憑着する当該死者の靈魂を抜きとり実家の墓地まで導き寄せて埋葬する巫俗儀礼」である。ユタなどの主導によって執行される場合が多く、死亡の場所を特定してから現地で丁重な供養儀礼をおこない、「死霊の憑依する小石や土塊を回向した線香とともに郷里へ持ち帰り、元祖代々の墓郭のなかに納める」⁵。

千代さんの夢に出る兄は、自転車に乗ってやってきて、自分が亡くなったのは浦添ようどれ（浦添市字仲間にある英祖王稜、ユードゥリと発音）近くの塚だと伝え、その塚に至る道順まで夢のなかで具体的に示した。この夢のことを母に伝えると、すぐにでもその場所に行き兄の魂を連れてくることを望んだ。しかし、当時は子どもも小さく車もなかったために実行できなかった。だから、毎月一日十五日や墓参りのときにはいつも「兄さんのことはいつか立派にやるからね」と手を合わせつづけてきた。亡き兄の願いを叶えるために現地でヌジファを行うことができたのは、戦後46年が過ぎた1991年、千代さんが59歳のときだった。

〈夢で見せた道をなぞる〉 [2012-09-07]

ヌル：戦争はね、この（昭和）20年だった、だったよね、戦争は。これやって、アイナー、1カ年ぐらいなりよったかな。戦争のね、戦死とって来ていた。

聞き手：（亡くなったのは）どこだか、わからない？

ヌル：首里、首里方面とって書かれていた。だから首里方面とって…、書かれていたわけさ。だから、夢でよ、夢だけど、うちの兄さんがね、「わたしの遺骨はないけど、どこどこに葬られているから、こっちから、ヌジファというのがあるでしょ、やって」と言って、お願い（をした）。うちの兄さんが自転車から乗ってきて、わたしにお願いする夢見たわけさ。だから、このときまでは、うちの子どもなんか小さいし（行けなかった）。またどここの浦添のユードウリの、もうほんとよ、夢だったけどや、（後で実際に行ってみたら）もうこれがほんとに自分が見たようになってるわけさ。

「あれ向こうのユードウリのね、こっちから入ったらずつとの上に登ったら、こっちに碑文（石碑）があるから、碑文の左側に下りていったところに大きな塚があるから。向こうからわたしのね、魂もって、墓にあれして（納めて）ちょうだいよ」…とってよ、夢見たわけさ。だけどもう、（そのときは）子どもも小さいし行けなくて。

何年前になるかね、うちの姉さんもいたし、うちの妹もいて、弟なんかみんないたからや、「まず行ってみよう」りちや（とって）。「これは確かめてから、向こうからやろうね」とって、（まずは下見に）行ったわけ。このユードウリというところ、行ったわけさ。だから、「とおー、あんたがたは、わたしの後ろから付いておいで。わたし見たことがあるから」とってよ。このユードウリから上に、大きなグスク（浦添城跡）、山だけど、道があるわけさ。この道ずつとしたら、こっちに碑文があるわけ。自分が（夢で）見た碑文があるわけさ。碑文から、碑文越えてこっちの行く左にね、下りていったら塚があるからと。（行ってみたら）もう、ほんとありよった。

聞き手：はあー…

ヌル：碑文あって、碑文のそばから下りていったら、〔声を潜めて〕ありよった。もうこれほんとよ、夢ではあるけど、この自分が見たように、〔語気を強めて〕立派にありよったからや。ほんとこれナー、うちの兄さんが、魂をあれして、自分の墓に連れてあれ（欲しいと願っていたの）だねーと思つてよ。これだけはもう、どうかわからんけど、わたし、自分で見たもんだから。

聞き手：そうですね。

ヌル：これだけはほんとナー、これたまにはあるんだねと思つてよ。

千代さんの語りを手がかりにして、私もまた、浦添市字仲間の現地を訪ねた。彼女が夢で見た碑文は「浦和の塔」と名付けられた慰霊塔だった。まさに、その塔の左手を回るようにして下っていったところ、デイゴの巨樹が枝葉を広げている下にガマ（洞穴）の入口があっ



写真7 ディーグガマ（上部にあるのが浦和の塔、2013年）

た。このガマには、ディーグガマ（デイゴガマ）という名が付けられていた。入口の案内板には、この塔は浦添村（当時）内の戦没者の霊を慰めるために村民の浄財によって1952年に建てられたこと、そして納骨堂には村内で亡くなった軍人および民間人5千人余柱が安置されていることが記されていた。

兄の並里幸敬が所属した石部隊は首里西北部や中頭の防備にあたった。1945年4月1日に北谷、嘉手納、読谷から沖縄本島に上陸した米軍が、しだいに日本軍の司令部がある首里方面に南進してくるのに対し、石部隊は各地で激しく抗戦しながらも後退を余儀なくされ、24日には首里に近い「仲間一前田一幸地」の浦添丘陵地に防衛ラインを敷いた⁶。その後、5月25日まで首里防衛戦が展開され、そのさなかに千代さんの兄もまた命を落としたとみられる。戦没者名簿には、同年5月22日に陸軍現役兵・歩兵として浦添の地で亡くなったことが記されている。

ヌジファを行うため、千代さんたち一行は日を改めて現地を再訪した。そのとき、実家の兄の位牌にこれからヌジファに向かうことをまず伝えてから浦添に向かった。そして現地に到着すると、すでに場所を確認してあった塚に直行するのではなく、近くの集落（字仲間と思われる）のニーヤーを訪ね、土地の神様に来訪の意図を伝えて許しを得るための拝みをしている。

〈塚近くのニーヤーを訪ねる〉[2012-09-07]

ヌル：この浦添の、ユードゥリというところだけ拝んだらできないからと思ってよ。「こっちのニーヤーまず訪ねて行ってみよう」と言ってよ。もうぜんぜんわからんシマでしょ、だから、こっちのニーヤーあるはずだからと来たらよ、ちょうどお家の前に車止めて。

向こうから人が来よったわけさ。聞いたら、ちょうどニーヤーの前に車止めて（いた）。

聞き手：はあー。

ヌル：行ったわけだけど、これだけはほんとよ、「神ん仏んいらっしやるねえ、メンセーサー（いらっしやるねえ）」と思っていた。もう自分が見たようにやったんだから、これだけはもう〔笑う〕。

聞き手：車を置いたところがニーヤーだった？

ヌル：ニーヤーだった。

ニーヤーでの拌みのさい、その土地の井戸から水を汲もうとしたが涸れていたため、代わりにニーヤーで水を汲ませてもらった。その後、供物を抱えた一行は、兄の魂を招く儀礼を行うために壕に向かった。

〈ヌジファ〉 [2012-09-07]

ヌル：向こうのあれも通さんといかないからや、こっちニーヤー、向こうのお家も通さんといかないから。で、井戸の水ももらってきて、やった。

聞き手：その井戸はどこにあったんですか？

ヌル：あの井戸はね、このお家の人が教えたわけさ、どこどこって。このお水とるんだけど、お水ないわけ。もうカラなって（涸れて）いたからね、このニーヤーからね、ちょっとお水もらってきて、「やって来ましたよお」と言ってお兄さんのところに報告。またお重作ってね、向こうからの（壕で火を付けずに供えた）線香みんな（備瀬の墓に）持ってきてやった。

聞き手：お重を作って行ったんだ。それお供えして。

ヌル：だから、うちの兄さんはタバコは吸わなかったけど、吸わなかったけど、もう兵隊さんもこっちに、たくさんいらっしやるでしょ。だから、「タバコ吸う人はね、このタバコ吸ってちょうだい」と言ってよ、もうタバコみんなあげた。…うちの兄さんはタバコ吸わなかったけど。

聞き手：その壕のところに、タバコ吸う兵隊さんもいると。

ヌル：うん。だからこっちから、自分のあれ（墓まで）にヌジファしていった人はあれだけど、こっちに残ってる人もいるはずと思ってよ。また、タバコもね、そのままやったらまたこっちに残るかといってよ。みんな火つけてめいめいね、吸ってちょうだいと言ってやった〔笑う〕。

聞き手：あーそうなんだ。そうか、そうだよ、その兵隊さんたちはいままでお兄さんと一緒にいて、今度はそこからお兄さんは帰っていくわけだからね。

ヌル：こっちにまた別れとって、またお重作ってね、「もうお兄さんはまたこっちから連れて行きますから」と言ってよ、このあれして。またうちなんかは、ウチハビ（打ち紙、

紙銭)、グソー（後生、あの世）のお金といってね、ウチハビあるでしょ。これみんなもう、このジーチ（土地）の神様、またこっちに残ってる人ね、みんな分けてちょうだいといってよ。たくさんまた、これもやってきたよ〔笑う〕。

聞き手：じゃ、あれなんだ。ご馳走も、そういう意味もあるんだ。その残された、そこから別れていく人たちに向けて振る舞う、供えるという意味もあるんですか。

ヌル：うん。

聞き手：なるほど、そうか。その土地の神さまと、別れていく人たちと、タバコもね。

ヌル：タバコもね、またグソーのお金もぜんぶ〔笑う〕。…うちはこんなにやると思っているから、自分が思うように、タバコもやったし、またグソーのお金、これはグソーのお金と決まっているから、これもたくさんあげて。お重作って、別れ。「今日は本部のどこどこにもう連れて行くから」と言ってね、別れ御恩といって、これみんなやってきた。

聞き手：そうか、そうか、だからもう出てこないんだね、夢にね。

ヌル：もうこのときからは、ぜんぜん見たことない。

聞き手：なるほど、そうか。そのヌジファというのは本人だけじゃなくて、そこから別れてく人たちに向けても拝むんだ。

ヌル：別れしないとね、この人なんか、人間のようにはうらやましくもやるかわからんけど、もうこれでお別れしようといってよ。ウチハビもたくさんやったしや、線香もやった、またお重も立派に作って行ってね、もう今日の別れですよといってね、やった。

聞き手：それで満足してくれたんだね。

ヌル：〔笑いながら〕満足したか、これはわからんけど、これからはぜんぜん。

聞き手：出てこないというのは、そういうことですよ。

ヌル：ぜんぜん見ない。…沖縄では、これが、もうほんと、しないとグソー極楽通らんとって。いつも人（よそ）のシマで苦労させている。人のシマでいるのも、苦労させるとってね。もうだから、もっと前にやるべきだったけど、もう子どもも小さいし車もないし。もういまは、自由にめいめいの車もあるから、もう行けるあれにやって。

備瀬に戻ると、壕の中で供えた線香と壕で掬った土、そして彼の地のニーヤーで汲んだ水を先祖の墓に供え、兄の魂を先祖の墓に納める拝みをした。

千代さんたちにとってヌジファは、たんに、亡くなった場所に在る兄の魂だけに関心が向けられていたわけではなかった。この儀礼の関心はそれだけでなく、兄の魂と別れ、残されてゆく者たちにも向けられていた。タバコに火を付け、あの世で使うお金であるウチハビをふんだんに燃やし、そして手作りのご馳走を詰めたお重を供える。そうすることによって、その土地の神様や壕で亡くなった他の兵士たちの霊に兄との別れを納得してもらい、羨望の感情が湧きあがらないようにと細心の注意が払われていた。死者たちも、生身の「人間のようにはうらやましく」思う存在として想念されていることがわかる。その具体性が一連の儀礼

に反映されている。

〈思いを届かせる〉 [2014-05-18]

ヌル：亡くなった人なんか、夢で見せたりするのはね、この人の、心の思っていること立派に拝みでやったらね、このときからはもう、この人は見えない。これさせるために亡くなった人なんか、また見えるんだって、神様もまたいろんなことするんであってね、これもう教えて、立派に自分の思ったのを通したらね、もうこれからはぜんぜん見えない。幽霊もいるかいけないかということは、うちなんかでないけど、わからんけどね、この人の思いさえ通したらね、見えないよ。わたしはこう思ってるから [笑う]。

聞き手：お兄さんのこともね。

ヌル：もうこんな思ってるからね、うちの兄さんのこともやってあげたから、もうぜんぜん、このときからはうちの兄さんもうぜんぜん何のあれもないからね。この人の思い届かしたら、もうこの人は、もうほんと極楽行って、…と思ってるけど。

聞き手：そうか、その思いをね、その人の思いを、通すんだ…

ヌル：だから、うちの兄さんのもんも、うちがこれだけやってあげたから、もうぜんぜんお兄さんのあれも見えない。だから、(亡くなった人が) いろんなことして、何言うよといって、いろんな人が言うのはね、この人の思い届かさないからいつまでも見えるんであって、思い届かしたらぜったい見えません。うん、わたしはこう思ってる [笑う]。

聞き手：はい。思い届かせることが大事なわけですね。

5. 神信仰の70年

神行事に臨むさいに千代さんが心掛けていることは、神様の前ではぜったいに怒らないということである。行事に参加する神人がまだ多かったころ、いつも融和的に行事を進めることができたわけではなかった。なかには自分のやり方の正当性を一方的に主張して、ヌルやニガミを非難する者もいた。そんなときには「神のころ」で臨むという姿勢を貫いた。この姿勢でいれば、相手の理不尽な主張も受け流すことができ、喧嘩にもならない。これは神様から教えられたことだという。

〈神のころ〉 [2011-08-26]

ヌル：神様にね、行事ごとに行くときには、神のころ、カミグクルもちなさいといってね。神様は怒らなくて。だから、このころもって拝んだら、誰が言ってもね、もうカミグクルもっていたらね、誰が言っても聞かない。だから喧嘩もしない。何もしないでね、通るから、カミグクルもって。…ころが悪かったらもう、あの人ともあの人とも喧嘩するさ。だからもう、行事ごとはね、備瀬の行事のときにはいろんなあれ、備瀬ではいろんな行事があつて、いろんな人がいらっしやるさあね。だからこのときにはね、もうかならずしも

カミグクル、神のこころ、カミグクルムッチー（神ごころをもって）、お祈りはしなさいって。人のヤナグチ（悪口）は聞かないでといってね。これ聞いたら、また悪くなるさーね。もう聞かないで、〔手をかるくパンパンと二度叩き、合わせる拝みしぐさをしながら〕神のこころもちなさいって。

聞き手：カミグクルっていうんだ。

ヌル：カミグクル。

聞き手：いい言葉ですね。

ヌル：チャー、カミグクル、モタシミソーレーりちや（いつも神の心もたせてくださいと言って）。…何一つ、ヤナグチ、オオグチ（大口）ってあるから、これしないで、神ごころもって、行事はしなさいといって、こう教えられてるからや、あのあれ。神ごころはいいもんだっただか、これもわからんけどね、神ごころもたせてちょうだいと言って。よその人のヤナグチ、オオグチは聞かないで。だから、もう、行事ごとには冗談はして笑うけどね、あれはしない。人とのいざごはしない。

聞き手：カミグクル、モタシミソーレー、いい言葉ですね〔ヌルさん、笑う〕。…

ヌル：だから、また、行事ごとに人といざごしたら大変さね、神様の前で。

聞き手：そうですよね、神様の前だからね。

千代さんは、つねに神のまなざしを感じながら自分自身の行動を律している。たとえ誰も見ていない状況であっても、神様だけは見ている。このような神様のまなざしは「頭に刻み込まれている」のだから、悪いことはしないと力を込める。

〈欲はもっても悪はとるな〉〔2012-08-09〕

ヌル：うちが考えたら、ほんと神の信仰するんだったら、何の欲もなくて、もうほんと立派にやるのが神様信仰した手本と思ってるけどよ、なかにはもう悪い人もいるよ。自分も悪い人かわからんけどね、こんな人がいる。

聞き手：うーん。…

ヌル：だからもう、ほんと人間はね、誰がも見なくても神様がは見えていらっしやるんだから、あまりナー、欲張りなことはするなよ〔笑う〕。

聞き手：そうですね、はい、はい。

ヌル：ほんとよ。

聞き手：そうですね。そうですね、神様が見てるんですよね。

ヌル：誰がも見ないけどね、神様がは見るんだよ。信仰しない人がは、もうどう思ってるかはわからんけど。もう自分は悪いことしたら、神様が見ているよ、見ていらっしやるよという、もう頭に刻み込まれているから、ぜったい悪いことしない。だから、子どもなんかに、「欲はもって悪はとるなよ」と（言っている）〔笑う〕。もうだいたいの人、欲のあ

るところはあるでしょう。でも、悪というものもう大変でしょ。悪はとるなよ。

聞き手：なるほどね、欲を完全になくすということ人間なかなかね、できないでしょうからね。

ヌル：うん。

かつて16名の神人たちによって構成されていたムラの祭祀組織は現在3名となり、千代さんをはじめ残った神人は「後継者はもう出ないかもしれない」と口を揃える。いまの時代、相談事に判断を示すことで収入が得られるユタになる人はいても、何の報酬も見込めないムラの神人になる人はいない。そう嘆きながらも千代さん自身は、これまで神信仰をしなければよかったと思ったことはないと強調する。また、ムラの人たちの支えがあったからこそ現在まで行事を続けてこられたのだと話す。

〈ムラの神信仰〉[2014-01-25]

ヌル：どこにもない拝み（行事）がもう備瀬ではいっぱいあるから。

聞き手：そうですねえ。

ヌル：何ひとつ昔のもの、やめたのはないけどね。もうどうなるかわからんけど〔笑う〕。

聞き手：だからね、ぜひね、ほんとに続けて頂いて。

ヌル：うちが、いるまでは続けていくはずだけど、もう3名が、元気のときにはできるけど、もう後々、出る人も、いないかいるか、もう。〈ねえー〉もういまの人は、こんなもんに出なさいといったら、もうお金儲かるユタさんにみんなが行くからや、もう出る人いないよ。…もういまの人は出ない。ユタさんには出るけどね、これには出ない。

聞き手：そうか。

ヌル：うちはもう、ほんと病も喘息もやって、もう歩けないくらいやって初めて（ヌルとして出た）。もうこのときまではユタさんということもあまりわからんから。

聞き手：小さいからね。

ヌル：やったんだけど。ほんと学校歩くときからもうこんな、〔笑いながら〕いま考えたらもう、できるかねえと思ってたけれどね。お家の人かね、親かね、やらんとぜったいできない。もう、うちのときまでは、区長、このときまでは、みんな信仰が強かったから、（自分がヌルとしてムラに出るときには）区長さんなんかもね、ぜんぶユタンヤー（ユタの家）行ったり、いろんなこと拜んできてやりよったけど、いまなったら、できない。ほんと自分のやったことを考えたら、もう入院したり、ナー、いろんなことやって初めてやったんだから。だけど、もう健康で〔笑う〕、これやって、やらなかったほうがいいかねーと思ったことはない。もうやって、家庭が円満で、あれしたらね、もう、これでいいと思ってる〔笑う〕。

聞き手：そうですね、もうヌルさんたちがこうやって拝み続けてるから、備瀬は備瀬なん

ですよ。そう思いますよ。

ヌル：だから、備瀬の人なんか、よく文句も言わないで、うちに、「ヌルさん」と言ってやるんだから。文句言われたら大変だけど、誰ひとり文句言う人もいないで、もう、うちが言うのスムーズにやっているんだから、これでいいと思ってる〔笑う〕。もう神信仰しない人がはどう考えてるかはわからないけれどね、ほんとナー、目にも見えないで手にも取れないことだけどね。…

千代さんの神信仰についての語りにはいつも、夫をはじめ、家族の支えと協力があってこそ現在まで続けることができたと感謝の言葉が繰り返される。ムラは神行事にかかる費用を祭典費として字（区）の予算に組み入れてはいるが、それらは供物や線香代に限られ、神人たちはその他に、手作りのお重を持参して供え拝む行事が少なくない。これらにかかる労力と費用は自前である⁷。

〈家族の支え〉〔2011-08-26〕

ヌル：これ（ヌルに出て）からは何の病気もしなかった。足（膝の）手術しただけで、喘息はもう年とってもやるよとみんなが言いよったけどや、喘息しなかった。しない。…ほんと、もうよ、このこと考えたらや、夢のころもつ。他の人は信用しないはずだけどね、もう自分でやっているんだから。

聞き手：そうですね。

ヌル：〔笑う〕、こんなに（病気を）やってるんだから、この神様にいまでもやってるんであって、ふつう何にもしないでは絶対しなかったはずよ。もう自分に、もう見せられていろんなことやってるんだから、これに出て。何の一銭の給料もなくて、自分持参で弁当も作って行って、やるんだから、もうほんと、うちのおやじ（夫）がよっぽど（理解ある）だから、できるんであって、なかなかだはずよ。

聞き手：いやー、ほんとですね。栄さんがね。

ヌル：また自分の子どもなんかも、小さいときからナーあれだけど、夜の（行事）、こんなやったらご飯も自分で食べさせて、やって誰ひとり、親に向かってなんとも言わないからね。

聞き手：そうなんだ、みんなね。

ヌル：家族が理解あるからやるんであって、何ひとつあれしたらできない。

千代さんは、人も物も目まぐるしく動き回るこの時代のなかで、自分は「どこにも行ったことがない」と言う。備瀬以外で働いたのも、30代半ばの2、3年間、伊豆味（本部町内の字）のパイン工場で働いたことがあるだけだった。現在も、ときおりゲートボールやグラウンドゴルフの大会に参加する以外は、ムラの畑と海を相手に過ごし、ムラの行事のたびに拝むこと

を続けている。

〈どこも行かない人生〉 [2014-05-18]

ヌル：うち16のときにね（ヌルに出て）、この備瀬からはどこも行かなかったことない。もう16からこっちに、ヌルという、いまのようにもう毎月の行事があるでしょう。だからもうどこにも行かないで [笑う]。

聞き手：いや、そうですね。

ヌル：どこにも行かなくて。もうこの備瀬からは出たことない。

聞き手：いや、大事な、ほんとに大事なお務め。ずうーとね。

ヌル：人、うちの言うのあまりあれ（信用）しないはずだけど、うちはね、自分がやったことはいまでももう覚えているから、忘れたことがなくて。もう夜なんか眠れんときにはね、やる（思い出す）んだけど、自分がやったのは忘れたことない。

聞き手：いや、そうか、すごいなあ、そういうふうに。だって、ヌルさんは、…備瀬のムラから（ヌルとして初めて出た）。それまでは謝花のヌルさんが来てやってたわけでしょ。

ヌル：謝花のヌルさんはね、クージ（公儀）といって向こうからの命令でやった。だから、うちの備瀬もいらっしやったけど。うちがわかるまで、このおばあちゃんは（備瀬に）いらっしやいよったよ。で、あの人が亡くなって後からはね、いろんなこともう、…備瀬は備瀬、謝花は謝花といってね、しないとできないということで、いろんなあれでうち（出た）。もう、うちのおつかあがね、「あんたのことやるためにはね、沖島丸のいっぱいお金使った」ということは、よくうちに言いよった。沖島丸のいっぱいお金使ったって [笑う]。いろんなところ行って、また拝みもする、また向こうから、ユタさんから出てくるのは、また「何々しなさい」と言ったら、拝みしないとできないでしょう。この拝みするのにもお金が入る（出る）でしょ。だから、うちのおつかあがしょっちゅう言いよった、うち（に）、「沖島丸のいっぱい使った」と言って。

V. ムラが生み、ムラを守る神人

1. ムラの意志を導いた夢

千代さんがムラで生まれヌルとしてムラに出るに至った1930～40年代は、かつて国の制度に組み込まれていた公儀ヌルの伝統はまだ残りつつも、その権威がしだいに薄まりゆく時代状況にあった。備瀬の場合、それまでムラの祭祀を管轄していた謝花の元公儀ヌルが亡くなったのをきっかけとして、ムラの祭祀組織が一気に弱体化する可能性もあっただろう。しかし実際にはそうはならなかった。むしろヌルの不在は解消されるべき事態として受けとめられ、ムラのヌルを送り出すという方向にムラの人たちの思いが集約されていった。戦中戦

後の混乱状態のなかにあったがゆえに、ムラ人たちは神信仰を抛り所にしたのかもしれない。千代さんは、こうしたムラの強い神信仰に支えられて、公儀ヌルの時代以後に備瀬で初めてのヌルとなった。当時のムラの雰囲気は彼女のつぎの語りからも伝わる。

〈神信仰の強さ〉[2014-05-18]

ヌル：いまの時代、いまの備瀬区だったら、うち（ヌルは）できなかつたと思う。このときはね、この区長なんか、有志といって、いよつたわけさ。この人なんかが信仰もう強かつたからできるんであってね、いまのあれだったらできなかつたはずと思う。このときまでは、区長さんに何々だからといって相談したら、またこの区長一緒にね、うちの門中と、ユタ、ユタさん拜みに行きよつた。

また、ムラ自前のヌルとして千代さんを送り出すという方向にムラの意志が収斂していったのは、この結着を予感させるような雰囲気がすでに醸成されていたことも大きく作用していた。そしてその雰囲気がムラ全体に浸透するきっかけをつくつたのは、夢という媒体だった。まず最初は、千代さんを身ごもつた母親が見せられた夢であった。流産が続いていた母親は、お腹の中の赤子を墮ろそうとする一歩を踏み出したとき、夢のなかで「備瀬の人ぜんぶから拜まれる女の子ができるから流産させるなよ」という声を繰り返し聞いた。心配になった母親が相談したユタの玉城マツさん（以下、マツユタと記す）も、「夢で見せられたとおり、流産させるな」と助言した。そしてお腹の子が無事に生まれたとき、神のことに敏感な老婆が母親の見た夢に呼応するかのようになり、「シマの人に拜まれる子ができた」とムラ中にふれまわり、マツユタもまた「この子は後々ヌルになる子だからあまりやたらに扱うな」と忠告した。これら一連の出来事とおして、生まれ落ちた女の子は将来ムラのヌルとなるという見立てがムラの人たちに播かれた。

そして二つ目は、病床にあった千代さん自身が見た夢だった。小学5年生になった彼女は、原因不明の手のむくみやじんま疹に悩まされ、さらには「生きるか死ぬか」というほどの喘息に苦しめられた。続けざまに現れる彼女の身体不調を受けて、マツユタは「ヌルとしてムラに出なければ後は大変になる」と言い、この病はヌルになるべきシラシ（知らせ）だと告げた。千代さん自身もまた、神信仰をしている人が見舞いに来ると一時的に病状が収まることを体験して、自分の変調が神信仰と関連があることを予感していた。

〈見舞客〉[2012-03-07]

ヌル：（病気で）寝ててもね、（見舞いの）人が入ってくるのよ。（すると）この人は神信仰していない、この人は神信仰している（とわかる）。この人が、もう信仰している人が来たら、ナーーほんと、自分の病気治りよつた。また、この人はと思う人が来たらや、もう大変だった。…見舞いに来たらね、信仰してる人と信仰してない人はすぐわかりよつた。…

この（神信仰している）人が話したらね、はい、この人一日中こっちにいたらいいがねと思うぐらいだったけどよ。ちょっとあれの人が来たらナー、もうぜったい話聞かなかった。大変だった。

病に苦しむ千代さんの夢に現れた白髭の翁は、「天・三・神・様」と一晩に一文字ずつ読ませ、「これだけ読めたらヌルに出られる」と言い残し、戦争とともに天に昇っていった。彼女は、この翁の言葉をひとつの啓示と受けとめ、ヌルになることを受け入れた。それは何よりも自分の健康のためであり、病気が治るのならばヌルに出てもいいと考えたからだった。病気にならなければ「ぜったいヌルに出なかった」と、彼女は幾度も強調した⁸。ともあれ、彼女を襲った身体の変調をたんなる病気として片付けるのではなく、ムラのヌルになるべき予兆として受けとめる周囲のまなごしのなかで、彼女はこの夢を見せられたといえる。親は娘の病にたいして、ユタにハンジを求めるだけでなく、サンジソウによる伝統治療を試みたり、隣村の近代病院に入院させたりするなどの多様な対処行動をとっている。そうした試行錯誤を経て、これは医者にゆだねるべき病気というよりもムラのヌルになるべきシラシである、との見立てを受容していったにちがいない。こうして、彼女の病は個人内に閉じた現象としてみるのではなく、ムラの神事（カミゴト）⁹として、またムラ全体に関わるムラゴトとして、位置づけられていった。

ムラのヌルを生み出す産婆役として、マツユタが果たした役割の大きさは言うまでもない。しかし、千代さんをヌルとして送り出すことをムラの総意とするには、これまでの事情に通じたこのシマユタの判断だけでは不十分であった。そのため、区長をはじめとするムラの有志たちは、ニーヤー門中から出ているムラの男性神役や門中のウクリー（女性神役）とともに、近隣他シマのユタを訪ねてハンジを求めた。その結果はいずれも、ニーヤー門中からヌルが出るべきでありそれは彼女を置いて他にはない、というものだった。このような幾重もの確認作業を経てムラの意志としてひとつにまとまっていった。

そして千代さんがヌルとしてムラに出てしばらくたったとき、「天三神様」を教えた先の翁がふたたび彼女の夢に現れて、ヌルが拜むべき場所を正すことになる。それまで、ムラの行事のさいにヌルは、門中のニガミやイガミとともに、ニーヤーのヒヌカン、ウタナ、トコ、仏壇を拝んでいた。しかし翁の教示は、ニーヤーのヒヌカンなどは、あくまでニーヤー門中のイガミが拜むべきもので、ムラのヌルはヒヌカン、ウタナ、トコを備えたヌル殿内を造りそれらを拝みなさい、というものだった。この教示は、ヌルはニーヤー門中から出てはいるもののムラ全体のことを拜むのだから、両者をきちんと区別しなければならないという意味だった。マツユタもこの指示のとおりにするようにと千代さんの実行を促している。その後、彼女が長い年月をかけていくつかの段階を踏みながら、ヌル殿内を完成させていった過程についてはすでにふれたとおりである。

千代さんはこれまで、この「ヌル殿内」の夢を幾度となく語ったが、彼女がこの夢のこと

にふれるのはいつも、先の「天三神様」の夢について語った後だった。この「ヌル殿内」の夢をいつ見たのかについては特定することはできないが、「天三神様」の夢が戦中期に見られたのに対し、「ヌル殿内」の夢を見たのはヌルになってからということは確かである。彼女が、時間をおいて見たはずの夢を一連のものとして語るのは、ヌルになる過程においてこの2つの夢がいかに重要であったかということを物語っている。公儀ヌルが配置されていたムラだけにあるヌル殿内とヌルヒヌカンを自分たちのムラに造ったとき、ムラ自前のヌル制度が完成したといえる。

ヌル殿内はいま、ムラの神行事のときにはかならず3人の神人が集まり行事開始の拌みをする場所となっている。ニーヤーでの拌みはニガミとイガミが主導し、ヌルのかかわりはあくまで副次的なものにとどまる。そして、ヌル殿内での拌みはヌルが先導する。ただ、ヒヌカンはヌル、ウタナはニガミ、トコはイガミというそれぞれの担当を決めて、3人すべてがかかわれるような配慮がなされている。毎月一日と十五日のヌル殿内の拌みでは、このウタナからグシク山とミーウガン（竜宮）にお通しをする。

2. 二つのまなざし

ヌルとしてムラに出た当初、千代さんは、神行事に集ってくる「お婆ちゃん」たちが年若い自分をたいそう敬う姿勢に戸惑いと恥ずかしさを感じていた。

〈恥ずかしさ〉 [2012-03-07]

ヌル：もう若いときには、ちょっと恥ずかしいと思っていたけどや、いまは何もない。このときまではほんとにヨォー、もうちょっと恥ずかしかった。だけど、このお婆ちゃんなんかかね、もうほんとね、行事行事のときにはね、もう敬って、もう大変だった。うちは17、18でしょ。ほんとに言葉遣いもや、年寄りに話しするようにしよった。「こんなにしないでもいいよ」と言うけどや。ワラビ（子ども）だからと言うけど、「うちなんかとは位変わるからや」と言って、ほんとにナァ、備瀬の年寄りの人は大変だったよ、敬って。もういまはあれだけど、このときまではもうほんと。

この戸惑いや恥ずかしさは、敬うべき存在として自分に向けられた相手のまなざしと十代の千代さんが自分自身に向けるまなざしとの落差から生じていたといえる。しかし、行事のたびにムラ人からの盃を受け、みんなが持参した重箱の御馳走を自分のお膳に載せられるなどの敬われる体験を重ねるなかで、ヌルとしての自己認識が定着し、これらの感情は消えていった。周囲のまなざしに影響を受けて自分に向けるまなざしの質が変容していったといえるだろう。

ところが、1970年代あたりを境にしてムラ的生活環境が変化するに伴い、周囲のまなざしにも変化がみられるようになった。新興宗教などのヨソガミを信仰する人たちが現れると、

ムラ人の総意でヌル扶持を贈る足並みにも乱れが生じ、この慣習はやがて途絶えた。また海洋博を契機にムラ外に職場を求める女性たちが増えると、ムラ内での農業を中心とする職住一体の暮らしを営む人は少数派となり、分離した住と職との間を車で往復するような生活スタイルが主流になっていった。その結果、ムラの稔りを土地の神に祈る姿勢も薄らいでいった。後続の世代はしだいに神信仰を相対化するまなざしを身に付け、神信仰を共にすることでまとまっていた世界に綻びが目立つようになった。したがって、神人たちが嘆く後継者が出ないというムラの現状は、神信仰を支える社会的基盤が失われつつあるなかで生じてきた事態といえる。

〈まなざしの変化〉 [2013-08-26]

ヌル：六月（大御願）にはね、かならずお重（をみんなが持ってきた）。（うちと）盃して、またお重も自分のもんから1つ2つ、うちに、あのお膳にのせてよ。ほんともう、いらっしやる人ぜんぶだから、お膳のいっぱい、みんな…あげよったのに。ほんともう、このときまでは、ほんとの神の信仰というのね、このばあちゃんなんかほんともう、神信仰ありよったけど。いまはもう、ない〔笑う〕。

神行事のときに神人を補佐する輪番制も乱れていった。ムラの年配女性が順番で担うサンナムは、年間を通して1人が務めたが、いまは引き受け手を探するのが困難になった。一週間続く七月行事のときに神人の手足となる雑用係のシニグワハムン（男性）は、南と北ごとに3名ずつ計6名が務めていたが、仕事を理由に断る人が多くその人選には区長がいつも頭を悩ませている。このような変化のなかで、神人たちは行事の進行そのものを司るだけでなく、その準備段階にも献身的に関わることで、年間20を超える行事を途絶えさせることなく、また従来のできるだけ変えずに続けている¹⁰。もちろん、千代さんが幾度も強調した家族の理解と協力がこうした営みを支えている。

それでも、神人たちが背負う神行事にかかわる費用はいまも、祭典費としてムラ（備瀬区）の予算に織り込まれ、供物代はムラ人が平等に負担するかたちになっている。四月や六月の大御願のさいには、以前に比べれば参加者はずいぶんと減ったが、20人余りのムラ人たちが思い思いの重箱や弁当を持参して集まってくる。かつてとは違い、「お婆ちゃん」たちよりも中高年の男性たちの参加がむしろ目立つのが最近の大御願の傾向である。だから、ヌルをはじめとする神人たちに向けられる敬いのまなざしは以前に比べだいぶ薄まったとはいえ、消えてしまったわけではない。千代さんは、神信仰について以前とは「天と地の差」があるとしながらも、「備瀬の人がよく文句も言わないで、うちに、『ヌルさん』と言ってやるんだから。文句言われたら大変だけど、誰ひとり文句言う人もいないで、もう、うちが言うのスムーズにやっているんだから、これでいいと思ってる」と、自分に言い聞かせるかのように語る。

いま辿ってみたように周囲の人びとのまなざしに変化はみられても、千代さんを揺るぎなく支えているもうひとつのまなざしがある。それは、彼女の深いところに内在化された神様のまなざしである。千代さんは、「誰も見ていなくても神様は見ているということは、頭に刻み込まれている」と言う。行事のときは神様を見習って「カミグクル（神のこころ）」をもって臨み、神様の前ではけっして怒らないようにと心掛けている。神様のまなざしはつねに彼女の振る舞いを律し、とるべき行動をときに夢のなかで伝えてきた。千代さんは、神様のまなざしを受けとめながら、いまもヌルとしての務めを果たし続けていることへの自負を口にする。「備瀬は昔からの行事はひとつも捨てたことはない、ぜんぶやっている。いつまで続くかわからんけど。だけど、自分が生きているあいだは立派にやる」。

では、彼女にとって神様とはどのような存在なのか、改めて問いかけてみた。

〈女の神様から贈られた宝〉 [2014-04-23]

聞き手：ヌルさんにとって、難しい質問かもしれないんですけど、神様というのはどういう存在なんですか？

ヌル：そうね、うちよ、1回は、「女の人の神様ですよ」と言ってよ。うちの庭のちょっと上でね、この人が白い衣装かけてよ、「神様です」と言って、女の人が。うちにナー、「宝あげよう」と言ってやった。これだけは神様というのは、いるといたらいるけど、いないといたら、神ヤウランと言ったらいない。いないけど、うちは信じているからや。天から下りてきて、うちにナー話しよったのはな、「ああ、この人が神様かな」と思ってる。女の人が…ほんとよ、これも夢に見るんだけど、この人が、きれいなもう白い、だからあれ、ヌル殿内にも白いドレス着けていた（戦前の掛け軸のこと）という話でしょ。…このドレス着けた女の人がよ、うちに来て、アッサイモー、この人のきれかったこと。この人がね、「宝あげよう」ということでよ、（このときから）30年になる。「宝、あんたにあげようね」と言ってよ、「あんたの思うようにしなさい、あんたに宝あげるから」と言って、うちの手に何か載せてよ。

（だからその後で）うちしよったさ。このお家造った [大きく笑う]。このお家造った。

聞き手：〔驚いて〕はあー…

ヌル：このきれいな女の人がよ、うちに「あんたに宝あげるから、あんたの思うようにしなさい」と言ってよ、2つの手によ、何か天から落としてよ。ちょうどフクギの、このフクギの先のところにきれいな女の人がいるわけさ。ナーほんと嘘と思うけど、ほんとだからや [笑う]。この手によ、何かわからんけど、重ねて3つだったわけ、こっちの上に。で、「ありがとう」と言ってやって。したら、「もう帰るから」と言って、この人また、手を上げてどこ行ったかわからんけど。やったから、「うち、ちょっとお家造ってもいいじゃないかね」（と思った）。…いろんなもう、自分でも信じられないくらいいのね、こんなの見せて、こんなにやっていくからね。

聞き手：ヌルさんは大事なときに、そういう大事な夢をね、見ますもんね。

ヌル：だから、ほんとと神様とって、あまり見たこともないけどね、あーカミンメンセーサー（神様はいらっしゃる）と思う。

3. 根の場所をなぞる

いま、千代さんには神様のまなざしがしっかりと「内在化」されていることを指摘した。彼女が、神様が自分を見ていることは「頭に刻み込まれている」と言うとき、いつどこにあっても神様のまなざしを感じていると理解してよいのだろう。しかしその一方で、神行事のさいに「神のこころ」で臨み、「人といざござしたら大変さね、神様の前で」という姿勢からは、たんに神様のまなざしが彼女のなかに取り込まれているというだけでなく、時と場所に感じて神様の存在が濃淡を変えながら感受されていることが伝わる。すなわち、神衣装を着けてムラの神行事に臨むそのときの拝みの場所こそは、他の場面よりもつよく神様のまなざしや気配を感じる場（時空間）といえるだろう。

ムラの神行事は、それぞれの行事によって巡るべき^{ウガンジュ}拝所が定められている。たとえば、年頭の初御願と年末のプトウチ（解き）御願のとき、神人たちはヌル殿内に集まって行事開始の拝みをする、グシク山→アサギ→ナカリユグと順に拝み、クビールからミーウガンを遙拝（お通し）して、ふたたびアサギに戻り、ヌル殿内で結びの拝みをする（それぞれの位置については、上・図1を参照のこと）。4月や6月の大御願では、ヌル殿内からアサギ→ナカリユグと拝んでからミーウガンに渡って島内3カ所の拝所を巡り、クビールで神人たちを待つムラ人たちと合流する。こうして主だった神行事のさいに拝む場所をなぞってみてわかるように、アサギを中心として、グシク山、ナカリユグ、ミーウガンという4つの場所は、いわばムラ（シマ）の根つこともいえるような神々と深くつながる拝所である。

そして年間20を超える神行事全体を見渡せば、神人たちが拝む場所はさらに多彩であることがわかる（表1）。3月の字シーミーではムラの草分けの墓所であるタマサとガンヤー（龕屋）ガマを拝み、5月のカー御願では、ニーガー（根井戸）、パマガー（浜井戸）、ウィガー（上井戸）、シリガー（後井戸）という4つの井泉を巡る。一週間続く7月の行事では、20日のウプユミマーでマーウイ（馬場）下の浜でニガミは舟を漕ぎ出す所作を繰り返してから手を合わせ、22日のサグンジャミでは集落内の辻々で悪風を祓う。男女のハシチ（強飯）はムラの草分けの家とされるアサギンシリーとニーヤーでそれぞれ作られ、25日のシニグ（ウシデーク）では、ニーヤーの他にも、ミチルバヤー、ヤマグシクヤー、アサギンシリーといったこの行事と縁のある旧家の土地を順に巡って拝む。ニーヤー以外はいずれも家屋は残っていないが、この拝む姿勢は変わらない。8月の彼岸ではグシク山の下手にある墓所などを巡る。10月のキトウ御願では馬場でムラの悪風を祓い、区長たち（かつては男性神役）がその悪風を乗せたバナナ葉の舟をミジパイと呼ばれる海への排水溝で流す。11月のウンネー行事ではウンネークブと名付けられた窪地で区長たちが牛汁を供えて手を合わせる。いまこ

表1 神行事における拝みの場所

旧暦	行事名	拝みの内容	拝みの場所	実見
1月	正月	シリガーの若水を供え拝む	N/n→a→n	○
	初御願	年頭初めの拝み	a→g→n→k→a→N	○
2月	二月ウマチー	麦の豊作祈願	a	○
3月	字シーミー	ムラ立てに関わる先祖の墓を拝む	ガンヤーガマの墓2カ所（アサギンシリ）、タマサの墓（ニーヤー）	
	ウバンジュミ	ソラ豆・麦の収穫感謝	N/n→a	○
4月	四月大御願	豊作祈願、健康願、重箱持参	a→N/n→n→m（3カ所）→k	○
5月	カー御願	井戸水への感謝、重箱持参	a→4つの井戸（①ニーガー→②パマガー→③ウィガー→④シリガー）	○
6月	六月大御願	豊作祈願、健康願、重箱持参	a→N/n→n→m（3カ所）→k	○
	ウバンジュミ	粟の収穫感謝	N/n→a	○
7月	ウプユミマー	豊漁・豊作祈願、航海安全	a→ナガレミヤー（アサギ庭）→マーウイ下の浜	○
	サグンジャミ	無縁仏の供養、家・ムラの祓い	a→集落内の各家をまわる、最後はN/n	○
	男のハシチ	男の子の成長祈願	N/n（男はアサギ庭）	○
	女のハシチ	女の子の成長祈願	a（男はアサギ庭）→N/n	○
	シニグ	シニグ舞を奉納、健康願	a（男はアサギ庭）、N/n→ミチルバヤー→ヤマグシクヤー→アサギンシリ	○
	タムトノイ	七月行事の終了報告、神人慰労	a→N/n→a（男はアサギ庭）	○
8月	神御願	アサギでの拝み、重箱持参	a	
	彼岸	ムラに関係する墓所を拝む	g（かつては十数カ所の墓所、桃原・浜元方面も）	
9月	ミヤーラン御願	打豆などの収穫感謝、重箱持参	a→N/n→n→m（3カ所）→k	
10月	キトウ御願	ムラの悪風祓い	マーウイ→男がミジパイでバナナ葉の舟を流す	○
11月	ウンネー	芋の豊作祈願、健康願	a→（男はウンネークブ）→a	○
12月	プトウチ御願	年末解きの拝み	a→g→n→k→a→N	○

注1 N：ヌル殿内、n：ニーヤー、a：アサギ（お宮）、g：グシク山、m：ミーウガン、n：ナカリユグ、k：クピール

注2 ほとんどの行事において、神人たちはヌル殿内で行事開始の拝みをするが、表中では省略した。

うして列挙してきた場所を数えてみると神人たちが行事で拝む所はムラ内の20カ所以上になる。

ただ、これらすべての場所が以前と変わらない姿をいまもとどめているわけではない。かつて引き潮のときにのみ水を汲むことのできたパマガーは、海洋博のときにイノーを埋め立てた人工ビーチが造られるとコンクリート枠で囲われ蓋をされた一角となり、こんこんと水が湧いていたというかつての面影は完全に失われた。シリガーの周囲は土地改良事業によっ

て畑の形が変わり、馬場下の浜はコンクリートの護岸によって海と分断された。ミーウガンでの拝みを終えて神人一行を迎えるクビールは、かつては砂地の広場だったがアスファルトが覆う観光客向けの駐車場へと姿を変えた。ウィガーやガンヤーガマのある段丘崖下の周辺は、海洋博のさいに遊園地となり、さらに近年12階建てのホテルの建つ敷地としてふたたび囲まれた。しかし、このように周囲の景観が変わっても、千代さんを中心とする3人の神人は変わることなく行事のたびにそれらの拝所に足を運び、手を合わせている。彼女たちが拝みつづけるその行為によって、これらの場所に込められた意味が瀬戸際のところで伝えられてきたといえるだろう。神人たちは、土地改良のさいにはすでに水の涸れたニーガーを上辺だけ道のそばに移動させるという提案を拒み、護岸工事のときには馬場下の浜辺に舟を漕ぎ出せるようなスロープを造るよう依頼し、駐車場となったクビールには車を止めさせない遙拝所としての空間を確保した。最近では、ホテルの敷地内となったウィガーとガンヤーガマは、ホテル側からの申し出もあって庭園の一角として整備されることになった。

行事のたびに神人たちがムラ内の拝所をなぞりつづけるこれらの行為によって、土地の神々やムラの先祖とのつながりを感じられる場所が保たれ、近代的な所有とはまた別の形でムラの共同の場所¹¹としての位置づけが維持されている。ムラの人たちは、神人たちが拝むことを通して守ってきたこれらの場所に包まれながら、他のどこでもないこの土地に生きる「ビシンチュ（備瀬の人）」としての日常を送ることができているのだと思う。

【注】

- 『琉球国由来記』（1713年）によれば、公儀ヌルが配置されなかった備瀬には「巫火神」（ヌルヒヌカン）はなく、「根所火神」において「謝花巫」（謝花ヌル）が祭祀を行うと記されている。伊波普猷・東恩納寛惇・横山重（編）[1940]『琉球資料叢書・第二』名取書店、461頁。
- 1961（昭和36）年に備瀬を含む上本部村（当時）では、「全村水道化」を実現したとの記録があるが、備瀬内ではその後も共同井戸の水に頼らなければならない家が少なくなかったという。
- 備瀬はアサギを境に南と北の地区に分けられ、南側をメンバーリ、北側をシンバーリと呼ぶ。
- 1975（昭和50）年7月20日から6カ月間、本部半島で開催された国際博覧会（特別博）で、メインテーマは「海—その望ましい未来」。備瀬の南端も会場となり、1973年3月から始まった建設工事によって周囲の景観は大きく変容した。本部町における15歳以上の全就業者数に占める建設業従事者数（構成比）の推移をみると、海洋博前の1970年には6725人中394人（5.9%）だったが、海洋博開催時の1975年には8240人中751人（9.1%）へと急増し、さらに1980年には6473人中951人（14.7%）となっている。なお、海洋博の会場は会期後に国営の海洋博記念公園として整備、運営されており、現在では2002年に開館した新水族館を目標に多くの観光客が訪れる。
- 桜井徳太郎 [1983] 「ヌジファ」『沖繩大百科事典・下』沖繩タイムス社、144-145頁。
- 玉木伸哲 [1983] 「石部隊」『沖繩大百科事典・上』沖繩タイムス社、179頁。
- リーブラは1966年の時点において、カミンチュが次第に一般の支持を得られなくなったムラでは、儀式にかかる諸経費をカミンチュ自身が負担しなければならない、と記している。W.P.リーブラ（崎原貢・崎原正子訳）[1974]『沖繩の宗教と社会構造』弘文堂、106頁。

- 8 津波は1982年の報告において、沖縄本島北部名護市の川上集落ではカミンチュ全員が「体の健康のため（カラタヌタミ）」にカミンチュとなったことにふれている。津波高志 [1990] 「祭司組織の変化と民間巫者」『沖縄社会民俗学ノート』第一書房, 125-149頁。
- 9 沖縄社会においては、危機的状況にある病者に対して、「イシャゴト」（医者）とみる眼と「カミゴト」（ユタ）とみる眼が、家族や近親者のあいだで、また個人の中で併存することにより、多様な対処行動がとられる。大橋英寿 [1998] 「ヘルス・ケア・システムをめぐる病者と家族の対処行動」『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』弘文堂, 461-549頁。
- 10 石井宏典 [2014] 「祈りの姿勢：ムラの神行事を守りつづける神人たち」茨城大学人文学部紀要・人文コミュニケーション学科論集16, 1-31頁。
- 11 イリイチは、コモنز（共有地）としての環境と商品を生み出す資源としての環境を対比させ、産業化によってコモنزが資源へと変質していくさまを捉え返している。I. イリイチ [1999] 『生きる思想』（桜井直文監訳）藤原書店。

本研究は、JPSP科研費（21530652および25380841）の助成によって支えられた。